

民放における字幕放送の現状と 多言語字幕

2014年2月26日

一般社団法人 日本民間放送連盟



1. 地上基幹放送の特質

- 同時性、同報性
⇒不特定多数の視聴者に同時に輻輳なく伝える。
 - 速報性、正確性
⇒視聴者が必要な情報をいち早く、正確に伝える。
 - 多様な番組内容
⇒教育・教養、報道、娯楽の総合編成。
- これらの特質は地上基幹放送が現に果たしている「公共性」の根幹。
- 放送・通信の連携サービスは、こうした地上基幹放送の特質を十分に尊重した内容、運用であることが重要。

2. 字幕放送の制度など

◆放送努力義務（放送法第4条第2項）

◆視聴覚障害者向け放送普及行政の指針

〔目標〕

- ・2017年度までに対象の放送番組のすべてに字幕付与
- ・大規模災害等緊急時放送については、できる限りすべてに字幕付与

〔備考〕

- ・県域局については、できる限り目標に近づくよう字幕付与する。
- ・独立U局及び放送衛星による放送については、目標年次を弾力的に捉えることとする。

「字幕付与可能な放送番組」とは次に掲げる放送番組を除くすべての放送番組

- ①技術的に字幕を付与することができない放送番組（例 現在のところ、複数人が同時に会話を行う生放送番組）
- ②外国語の番組
- ③大部分が器楽演奏の音楽番組
- ④権利処理上の理由等により字幕を付与することができない放送番組

3. 民放における字幕放送の現状

（1）行政指針の対象となる放送番組における字幕番組の割合（平成24年度実績）

- ◆在京キー5局：93.3%
- ◆在阪準キー4局：92.0%
- ◆在名広域4局：84.7%
- ◆全国の系列ローカル局：66.4%
（在阪準キー4局と在名広域4局を除く101社）

3. 民放における字幕放送の現状

(2) 民放の字幕放送の取り組み

①HDTV放送向け字幕(12セグ字幕)

- ・収録番組の字幕制作⇒完成した番組を視聴しながら、台本やシナリオを参考に制作する。
- ・生放送番組の字幕制作⇒放送音声をワープロで高速に文章化したり(高速ワープロ方式)、専門アナウンサーが復唱し音声認識させたり(リスピーク方式)して制作している。

②携帯端末向け字幕(1セグ字幕)

- ・原則、HDTV放送用字幕を変換して生成している。

3. 民放における字幕放送の現状

(3) 生放送字幕の制作方式

①高速ワープロ方式の概要

- ・音声コメントを複数のワープロ入力者が一定文節ごと順番に字幕文章化する。その字幕文章をマージし、校正者がチェックして送出する。

②リスピーク方式の概要

- ・音声コメントを、アナウンサーがリスピークし、音声認識させ、一定文節ごとに校正者がチェックし、マージして送出する。

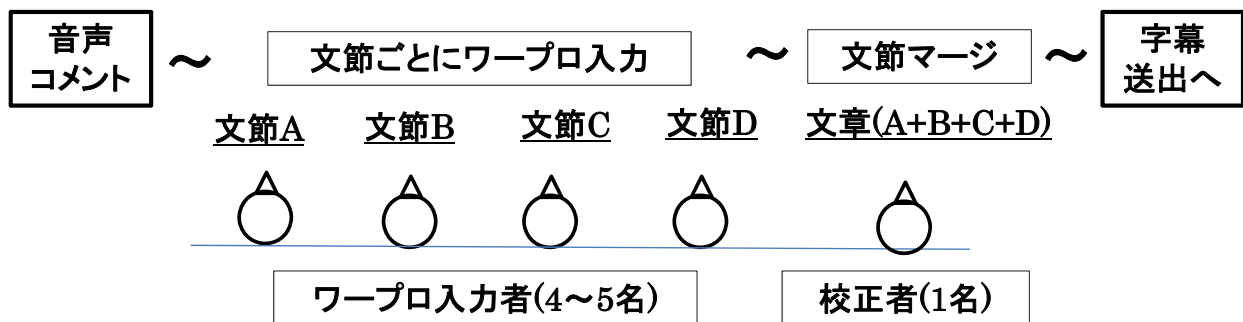
(注)生放送字幕の効率的な制作は極めて重要な課題で、民放各社は数々の工夫をしてきた。

3. 民放における字幕放送の現状

(4) 高速ワープロ方式の工夫(織田鉄砲隊方式)

・ 文節入力を複数の入力者でリレーしながら行うため、熟練した技量とチームワークが必要である。このため、「織田鉄砲隊方式」や「リレー方式」などと呼ばれた。

(注)在京局ではフジテレビ、テレビ朝日、テレビ東京、TBSテレビなどがこの方式をベースに運用している。

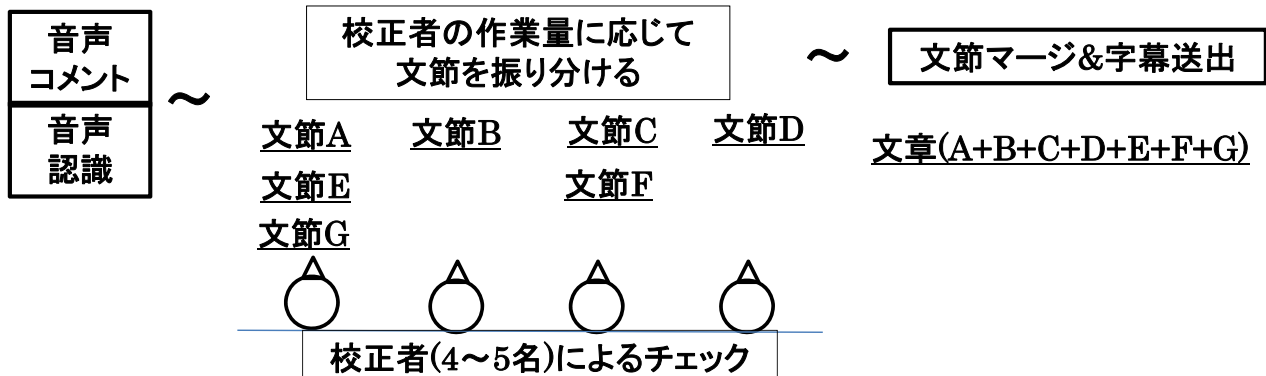


3. 民放における字幕放送の現状

(5) リスピーク方式の工夫(わんこそば方式)

・ 音声認識された文章を文節ごとに校正者の作業量に応じて振り分ける方式。作業者間の連携は不要で、かつ校正者の技量に応じた作業が可能である。このため、この方式を「わんこそば方式」と呼ばれている。

(注)在京局では、日本テレビがこの方式で生放送字幕を制作している。



4. 今後の検討にあたって

スマートテレビにおける多言語字幕の検討は、以下の諸点を検証しながら進めていくことが必要ではないか。

- 多言語翻訳や多言語字幕を必要とする社会情勢、外国人等のニーズに関する見通し。
- 多言語字幕の利用者や利用場面の想定。
- 多言語翻訳システムの用途として、放送分野のほかに実現が期待される分野。

4. 今後の検討にあたって

- 第1回WGでは、「翻訳内容の正確性や表示の遅延等」、「多言語字幕を制作する第三者への情報提供」といった課題が挙げられましたが、いずれも冒頭でご説明した地上基幹放送の特質に深くかかわる問題であると考えます。
- スマートテレビにおける通信・放送の連携サービスが真に新たな価値を生み出すには、それによって地上基幹放送の特質を損なうことなく、補強、発展させるという視点が極めて重要であると考えます。